

アマルティア・センの潜在能力論とその発展的応用*

岡部光明

【概要】

主流派経済学において前提される人間は、利己主義的かつ合理的に行動するという単純な人間像であるが、人間の本性はもっと多面的である。このため、人間の一面だけに焦点を当てつつ社会を理解しようとする主流派経済学は、社会科学として本質的な問題を抱えている。経済学のこうした状況を手厳しく批判するとともに、新しい研究方向を提示したのが経済学者・哲学者アマルティア・センである（1998年にノーベル経済学賞を受賞）。本稿では、人間の幸福と社会のあり方を理解するために彼が提示した潜在能力論（capabilities approach）という枠組みを概観した。次いで、その人間観を発展的に応用したものとして位置づけることが可能な一つの間論ないし実践哲学を紹介するとともに、それが持つ社会的含意を論じた。

主な論点は次のとおり：（1）人間の幸福あるいは善い生活（well-being）を捉える方法として従来、効用（utility）を基礎とする主観的アプローチ、財産（resource）を基礎とする客観的アプローチが標準的なものとして存在した、（2）それらの欠陥を補正するためにセンが開発したのが潜在能力アプローチでありそれは主観的要素と客観的要素の両方を含む、（3）人間の潜在能力の開放を重視するその思想は自己実現を重視する現代の一つの実践哲学と重なる面がある、（4）その実践哲学は、普遍性、現代性、社会性、そして実証性を備えているので今後の展開が注目される。

キーワード： 善い生活（well-being）、潜在能力、自己実現、実践哲学

* 本稿は、総合人間学会（2018年6月16-17日、於明治大学）および日本経済学会秋季大会（2018年9月8-9日、於学習院大学）における発表論文（岡部 2018a）の主要内容の一部を構成する基礎論文である。この初期草稿に対して、青木千里（放送大学）、前山総一郎（福山市立大学）の両氏から有益なコメントをいただいた。

はじめに

現在の主流派経済学（新古典派経済学）は、人間の行動について単純な前提（利己主義的かつ合理的な行動をするという前提：ホモ・エコノミカス＜経済的人間＞）を置くことによって理論の精緻化・体系化を進めるとともに、様々な政策提案を行ってきた。しかし、人は単に個人として生きるだけでなく、個人相互間の関係が重要な意味を持つ社会的存在でもある。こうした点に着目すれば、経済学の発想とその理論体系は従来と相当異なるものになり、また公共政策論も人間性を帯びたものになりうる。筆者は、こうした視点を近刊書籍（岡部 2017a）で詳細に展開するとともに、その要点を別途紹介した（岡部 2017b）。

本稿では、そうした問題意識を踏襲し、人間は何を目的に生きているのかという原点に立ち返り、先ずそれを理解し評価するための一つの有力な枠組みを採り上げる。それはアマルティア・セン（Amartya Sen、インド出身の経済学者・哲学者、米ハーバード大学教授、1998年にノーベル経済学賞を受賞）が提唱した潜在能力論（capabilities approach）という発想（Sen 1985）である。次いで、個人の生き方とその社会的帰結に関する一つの「実践哲学」（高橋 2017 他）を採り上げ、その概要を紹介するとともに、それはセンの潜在能力論をさらに発展させた一つの思想とその実践論として位置づけることができることを論じる。

上記の二つ（潜在能力論、実践哲学）は相互に独立したものである（両者を同時に論じた文献は見当たらない）。しかし、本稿で言及する実践哲学は、センの潜在能力論を発展させ応用したものとして位置づけることが可能であり、またそれは良い生活（well-being）と社会の発展を導く可能性があることを論じる。両者はこのように関連を持つので、その間を論理的に架橋することが可能ではないかというのが本稿の趣旨である。

以下、1節では「良い（善い）生活」を理解する従来の二つのアプローチを指摘し、それと対比するかたちでセンの潜在能力アプローチ（Sen 1985）を簡単に紹介する。2節では潜在能力論の概要を紹介し、3節ではその評価を行う。4節では、実践哲学（高橋 2017 他）の基本要素を紹介するとともに、その思想は潜在能力論を発展的に応用したものとして位置づけることが可能であることを論じる。5節は、本稿の要約である。

1. 良い生活に対する三つのアプローチ

人間は何を目的に生きていると理解できるのか。またそうした理解をもとにした場合、どのような学問的枠組みで人間の行動やその社会的帰結を論じることができるだろうか。これに対しては、従来から様々なアプローチがあるが¹、ここでは、従来の発想を二つの流れとして理解するとともに、それらのアプローチよりも広い視点に立つものとしてセンの潜在能力

¹ この問題に対する各種視点の詳細は、岡部（2017a：6章および7章）を参照。

論をまず位置づけてみよう（図表 1）。

図表 1 良い生活 (well-being) に対する三つのアプローチ

	効用 (utility) を基礎とするアプローチ	財産 (resource) を基礎とするアプローチ	潜在能力 (capability) アプローチ
基本的な考え方	<ul style="list-style-type: none"> ・主観的アプローチ。 ・欲望の充足 (効用) という主観的な幸福に焦点をあわせる効用主義 (utilitarianism)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・客観的アプローチ。 ・良い生活をするための手段 (所得・財産) の獲得状況を重視する物的幸福論 (resourcism)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主観的要素と客観的要素の両方を取り込んだアプローチ。 ・幸福をもたらす「機能」の実現とそれを可能にする潜在的な要因を重視。
その発想に基づく代表的な統計尺度	一人あたり GDP	一人あたり資産額	国連の人間開発指標*
長所と短所	<ul style="list-style-type: none"> ・幸福をもつばらフローの経済指標 (所得) で把握するので簡便。 ・ただ幸福の理解が一方的に過ぎる。また視点が極端に個人主義的。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幸福を各種ストック指標 (資産) も含めて把握する点である程度多面的。 ・幸福を経済的側面だけから理解する点では限界がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・経済的な尺度だけでなく、より幅広い側面 (寿命、知識へのアクセス等) をも考慮。 ・どの潜在能力をどう組み合わせるかなどの理論化が不十分。

*健康、教育、所得の3要素を同一ウエイトで合成した指標。

(出所) Robeyns (2016)、Wells (2017)、Wikipedia (2017)、岡部 (2017a : 6章) を踏まえて筆者が作成。

(1) 効用を基礎とするアプローチ

一般的にいえば、人は幸福 (happiness)、良い生活 (well-being)、あるいは良い人生 (good life) を目指して生きていると理解できる。その場合、これらの用語や概念を明確に規定する必要があるが²、最も単純かつ経済学における伝統的な方法は、個人の欲望がどの程度充足されているかという主観的な幸福 (効用 : utility) に焦点をあわせる考え方である。

すなわち人間は、自らの満足度 (すなわち心理的幸福) を最大化するように行動しているとする発想であり、学説史的にみれば J. ベンタムの流れを汲む古典的な効用主義

² 「幸福」あるいは「良い生活」などにつき、どのような日本語表現をするかは一つの大きな課題である。英文書物の邦訳書では、原書における異なる表現 (例えば happiness, well-being, welfare など) を区別せず全て「幸福」という日本語で統一しているような場合もある。しかし、心理学では従来からこれら用語のニュアンスを区別することに気を使っているうえ、これら各概念にはかなりの相違がある。このため本稿では、前著 (岡部 2017a : 222-226 ページ) におけると同様、各用語のニュアンスを尊重し、必要に応じて幸福、良い生活 (good life; well-being)、善き生 (well-being)、良い人生 (good life)、幸せな人生、意義深い人生 (meaningful life, エウダイモニア) などと、ある程度使い分けることにする。これらの詳細は、岡部 (2017a : 172-179 ページ) を参照。

(utilitarianism) の流れに該当する。これは主観的なアプローチと特徴付けられる。

その発想に基づく代表的な統計尺度としては「一人あたり GDP」がある。これは、所得が多ければそれによって獲得できる財やサービスが増大するので効用が高まる、という考えに基づく。しかし、それは一つの簡便な経済的尺度であるものの、それをもって社会全体の幸福度と同一視するのは、明らかに単純に過ぎる。なぜなら、所得ないし資産の分配面における平等ないし不平等の度合いが考慮されていないからである。また、権利や自由など、人間の幸せにとって効用とは別に本源的な価値をもつことがらが全く考慮されていない面においても、これには大きな限界がある。

(2) 財産を基礎とするアプローチ

経済学におけるいま一つの一般的アプローチは、所得 (income) に代えて、あるいはそれだけでなくそれと同時に、各種財産 (resources) に焦点をあわせる考え方である。各種財産の保有が多ければ、それによって獲得できる財やサービスあるいは各種の活動機会が増大するので、良い生活がもたらされるという理解に基づく。これは、良い生活をするための手段 (所得・財産) の獲得状況を重視する物的幸福論 (resourcism) と理解できる。

これは、良い生活をするための手段に着目する点で効用主義よりも幅広い視点に立つ。また効用主義が主観的アプローチであるのに対して、これは客観的アプローチだといえる (一人あたり資産額など客観的指標が基礎になるため)。しかし、経済的側面 (資産の多寡) をもとにして幸福を理解する点では、効用主義と同様に大きな限界がある。

また、人々が資産を適切に活用するための潜在能力を持ち合わせていないような場合には、資産の多寡に意味は乏しい (その点で人間には多様性があることが考慮されていない)。例えば、強度の身体障害者が日常生活をする場合、健常者に比べてはるかに多額の所得が必要になるので、たとえ保有財産が等しいとしても、生活の質の享受においては大差が生じる。

(3) 潜在能力アプローチ

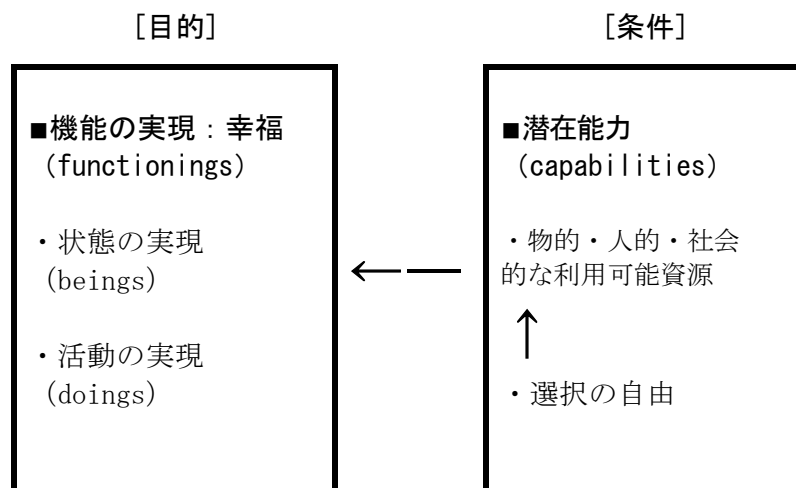
財産や所得は、確かに我々ができること、できないことに対して大きな影響力をもつ。このため、人はともすれば目先のモノあるいは金銭的な富の多さに目がゆき、最終目的を忘れがちになる。しかし、これらはいくまで人が本来的に備えている力 (潜在能力) を実現ないし拡張する手段にすぎない。センの潜在能力アプローチ (capabilities approach) は、従来のアプローチが持つこうした問題点に着目し、それに対応する新しい概念として示された一つの枠組みである。

それは (1) 幸福 (well-being) を判断するうえでは所得や財産が唯一のものではないという基本認識に立っていること、(2) 幸福の手段だけに着目するのではなく、まず良い生活 (good

life)とは何かを規定し、それを実現するための社会的・道徳的原則（自由など）にも言及しつつ幸福の潜在的可能性に眼を向けていること、などが特徴である。

これは、次節で述べるとおり、主観的要素と客観的要素の両方を取り込んだアプローチである。すなわち、幸福をもたらすための「機能」を規定、その実現とそれを可能にする潜在的な要因（寿命、知識へのアクセス等）をも考慮している。このアプローチは、2000年代初めに国連による人間開発指数（Human Development Index：HDI）の作成というかたちで結実している。そこでは、人間の三つの基本領域（長寿で健康な生活、知識へのアクセス、まともな生活水準）に関する統計を合成した一つの包括的指標として HDI が作成され、公表されている³。

図表 2 良い生活（幸福）に対する潜在能力アプローチ



(注) Robeyns (2016)、Wells (2017)を踏まえて筆者が作成。

2. Sen(1985) の潜在能力論：その概要

センによって提唱された潜在能力論、あるいは幸せな人生 (well-being、good life) に対する潜在能力アプローチ (capability approachないし capabilities approach) は、人間とその幸福を理解するための一つの理論的な枠組みである。ただ、それが提示された原典 (Sen 1985、セン 1988) が相当難解であり、またその後、研究者によって書かれた紹介や解説論文も必ずしも平易でなく⁴、さらに重点の置き方にもかなりの差異がある。そこで以下では、それらのうち比較的理解しやすい説明がなされている Robeyns (2016)および Wells (2017)に主として依拠しつつ、この潜在能力論を概観することとしたい。

³ その指数の詳細は、岡部 (2017a：172-179 ページ) を参照。

⁴ 例えば、この分野におけるわが国の権威者による解説として鈴木・後藤 (2001：第6章) があるが、そこでの説明は筆者にとってかなり難解であった。

二つの基幹概念

人間を理解するに際して、従来の経済学では「効用」（欲望の充足度）あるいはそれと密接に関係する「所得や財産」の多寡が重要な判断基準として標準的に受け入れられてきた（そして現在の主流派経済学では依然としてそれが踏襲されている）。

しかしセンは、人間にとってより重要なこと（良い生活、良い人生）からみると、そうした尺度には基本的な欠陥がある（あくまで間接的な関係を持つに過ぎない）と批判、それらに代わる評価基準として、人は「どのような存在でありうるか」そして「何をなしうるか」という二つの視点を導入した。この見解は、人がこうした「機能」を十全に果たすこと（実現すること）を幸福（well-being）と捉え、その状態を実現させるための条件（自由など）と一体的に理解すること（評価の対象とすること）によって人間の実際の状態ならびに潜在能力を理解する、という発想だといえる。これは、**図表 2**のように図示できよう。そこでの基幹概念は「機能」（functionings）と「潜在能力」（capabilities）の二つである。

センは、まず人が生活の質（quality of life）を向上させること、あるいは「幸せ」（well-being）を達成することを「機能の実現」（functioning）だと理解する。そして、それには一定の状態が実現していること（beings）、または一定の活動を実際に行うこと（doings）のいずれかで表現できると考えるとともに、幸せを判断するうえでは、その両方が重要である、と主張する。つまり、潜在能力アプローチにおいては、機能の実現（functioning）というユニークな概念が導入されており、それを具体的に把握するうえで、状態（beings）および活動（doings）という把握方法が提案されている。

例えば、前者（beings）には、良い栄養状態にある、食料が自由に入手可能な状況にある、快適な居住環境に置かれている、あるいは不健康な状況に置かれている、といった状態が含まれる。一方、後者（doings）には、食料を買う、旅行する、育児をする、選挙で投票する、麻薬を吸う、慈善事業に寄付する、といった行動をすること（できること）が含まれる。

より具体的な例を挙げれば、人の状態としては、「ほどよく暖房の効いた」快適な家に居ること（状態：being）、自分の家の暖房のために「多量の」エネルギーを消費すること（行動：doing）のいずれかの表現が可能であり、性格を異にするこの両方を考慮する必要がある。このように考えると、潜在能力アプローチでは、良い生活を理解するための主観的視点（感情）と客観的視点（数量）の両方が取り込まれていることがわかる。

以上が、機能を実現した状態（functioning）であるが、問題はそれが実現できるかどうかである。その判断に対応するのが潜在能力（capability）という概念である。これは二つの要素から成る。一つは、人が実際に利用可能そして選択可能であり、かつ価値を持つ各種の状態（潜在可能性の集合：capability set）が存在することである。そして、もう一つは、

人がそのうちから選び出す「自由」が現実に確保されていること (effective freedom) である。

つまり、潜在能力を構成する要素として (選択の) 自由という倫理的な概念を根源的に重要な要素として含む点が大きな特徴である。この点において、センの潜在能力論は標準的な経済学の枠組みにとどまらず、倫理学にもまたがるものとなっている。

二つの倫理的命題に帰着

従って、センが提示した以上のような潜在能力論は、結局二つの規範的命題に帰着する (Robeyns 2016)。すなわち、潜在能力論は(1)人が幸せ (well-being) を達成するための自由は道徳の観点から根源的に重要である、(2) そのために人は潜在的な可能性 (capabilities) すなわち幸せを実現する機会を持つ、という 2 つの規範的な主張になる。とくに、自由を重要な要素として把握していること (倫理性) に潜在能力アプローチの神髄がある (鈴木・後藤 2001 : 188 ページ)^{5 6}。

こうしたセンの主張は、人間の本性 (human nature) を単に利己的行動をする主体と捉えるのではなく、それには多面性があることを根底に取り込んだものである。そうした人間観は、思想史的にはアリストテレス、スミス、マルクスによって先鞭を付けられた哲学的な立場であり、経済学者・哲学者であるセンの思想はそれを継承するものとして位置づけられる⁷。また「良い生活」 (well-being) は個人にとって追求する価値のある「善」と捉えるとともに、それは社会的コミットメントを要請する価値のある「善」でもあると位置づけ、そうした善に対する望ましい社会的援助や保障のあり方を考察する新しい視点からの政策論を提示している (鈴木・後藤 2001 : 24 ページ) のも一つの特徴である。

以上を要約すれば、次のようになろう。すなわち、潜在能力アプローチは人間の幸福ないし良い生活 (well-being) に関する一つの理解方法であり、そこでは (1) 選択の自由、(2) 個人の多様性 (heterogeneity)、(3) 幸福の多次元性 (multidimensional nature of welfare)

⁵ センが、自由 (選択の可能性が存在すること) を潜在能力の重要な構成要素としたことは、大きな含意を持つ。例えば、結果的には同じ餓死という悲惨な結末に至るにせよ、政治的抑圧に抗議して食物の摂取を自律的・責任的に拒否して「断食」による尊厳死を迎えた人と、極貧の衰弱によって摂取すべき食物が得られないために選択の余地なく餓死した人は、食べない点 (functioning) で共通しているものの「良い人生にとっての自由」 (well-being freedom) という観点からは異なった評価をする必要がある (セン 1988 : 7-8 ページ ; 鈴木・後藤 2001 : 188 ページ)。前者の場合は、自由に選べるという意味での潜在能力が大きい、後者の場合はそれが小さいからである。

⁶ センによるアプローチが、機能アプローチ (functioning approach) と称されず、潜在能力アプローチ (capability approach) と命名されているのはこのためであろう。

⁷ アリストテレスの幸福観 (エウダイモニア) は、人間相互の関係を規定する倫理 (徳) と密接な関連を持つ (岡部 2017a : 7 章)。またスミスは、人が他者に対して抱く感情 (道徳感情) を重視、それを深く考察した (岡部 2018a、2018b)。

が強調される。

3. 潜在能力論の評価：特徴と課題

以上で概観した潜在能力論は、どのような特徴を持っており、どう評価できるのだろうか。すでに述べたことと多少重複する面があるが、以下それを整理しておきたい。

特徴

第一に、1980年代後半にセンによって提案された潜在能力論は、「幸福」ないし「良い生活」あるいは「善き生」(well-being)を理解するために「機能」と「潜在能力」という新鮮な分析概念を導入し、人間を理解するうえで新たな枠組みを提供したことである(鈴木・後藤 2001: 8 ページ)。

それは、従来重視されていた財や所得といった「財産」(resource)ではなく、また財産の利用から得られる「効用」(utility)でもなく、財産と効用の狭間に挿入された“理論的中間項”である「機能」(functionings)に注目するという新しい視点である(同 185 ページ)。前述したとおり、それは主観的視点と客観的視点の双方を取り込むものであり(幸福をもたらす要因の多次元性を把握)、この結果、従来の効用概念あるいは財産概念を基にした分析にはない新しい視点に立って、生活の質、貧困、不平等などの理解を深めるとともに、人の機能達成を妨げる社会的要因を除去する政策発想を支援するものとなった。具体的には、潜在能力アプローチによって、国連の人間開発指標(HDI)の開発が理論的に支援されたことがその一例である。

第二に、潜在能力論が前提とする人間は、固定的なホモ・エコノミカス(利己的・合理的に行動する経済的人間)ではなく、潜在性に富む存在としての人間であり、またその平等性が前提されていることである。その点で、思想史的にはアリストテレス、スミス、マルクスなどの人間観を継承している(セン 1988: 2 ページ)。この点は、現代の主流派経済学が前提する狭隘かつ固定的な人間観に再考の余地があることを警告するものである。

センは、こうした人間観はアダム・スミスを継承するものであることを示唆している⁸。例えば「アダム・スミスが、階級、ジェンダー、人種、国籍の壁を軽々と飛び越えて人間の潜在能力は等しいとみなし、天与の才能や努力に本質的な差異を認めなかったことは注目に値する」(セン 2014: 27 ページ)と指摘、潜在能力は平等である一方、「階級区分は機会の不平等の反映であるとするスミスの見解には妥当性がある」(同)としている。

⁸ センは「労働者の差は、生まれつきの天分よりも習慣や教育の違いによるものだと思う」(アダム・スミス『国富論』1部2章4節)を引用している(セン 2014: 28 ページ)。

課題

第三に、幾つか重要な課題が残されているとの指摘も少なくない。その一つは、理論化の不十分さ (under-theorization) である (Wells 2017)。良い生活にとっては、どの「機能」が重要になってくるか、その評価手続きが明確化されている必要があるが、センは哲学的根拠による選択を拒否、評価は社会的選択によること (公衆からみた意義、民主的手続きによる意思決定) を主張するにとどまっている (同)。同様に、どの潜在能力が大切か、そしてそれらがどう組み合わせられるべきか、については何も述べていない (それは社会自体が政治的に決定すべきことがらとしている)。価値ある潜在能力につき、客観的に正当化できるリストがなければ「達成するのが望ましい社会」とはどのようなものが不明確であり、したがって実現すべき公正な社会という目標も不明確にとどまる。また、どの潜在能力を優先的に達成すべきかも不明確である。

また、このアプローチは個人主義的色彩 (individualism) が強すぎるとの批判もなされる (Wells 2017)。これは、共同体ないしコミュニティの役割を重視するコミュニタリアン (communitarian) の視点からみた批判である。すなわち、センの説明は個人としての人間を焦点とするものであり、人間コミュニティへの関心が低く、コミュニティの価値やコミュニティと人間との関係がほとんど視野に入れられていないからである (同)。さらに、倫理の一側面は取り入れられているものの、より広く人間を捉えた場合、その社会性という側面 (人と人との関係、例えば友情、尊敬、世話、道徳的基準) への考慮が欠けている。また、1人の個人の自由が他の個人の自由はどう影響するか、も扱われておらず、さらに個人の個人的成長 (personal growth) という重要かつ複雑な課題への切り込みが不十分との指摘もみられる。以上はいずれも、今後の研究課題といえよう。

4. 潜在能力論の発展的応用：一つの実践哲学

以上概観した潜在能力論の核心は、二つに集約できる。一つは、個人としてもまた社会としても、各種のことがらが潜在的に実現可能であるにもかかわらず、それが顕現化できていないこと (潜在能力) に焦点を合わせる、という視点である。もう一つは、その視点をもとに社会の状況を判断するとともに、そのあるべき姿を追求し、そしてそれを実現するための公共政策を解明する、という視点である。むろん、現実をこのような潜在的可能性に直ちに合致させることはできない。

しかし、大きな視点からみると、社会科学 (とくに規範的政策論) は、こうした潜在性とのギャップを埋めるための考察を様々な視点から行うことに他ならない、と理解することができる。

例えば、社会を運行させる仕組みとしての「市場」は、人間の理性や情報処理能力には限界があるため、それを分権的に解決するための社会制度だと理解する。また、人と人との関係を様々な強度を伴って規定する「道徳」や「倫理」は、人間相互間の行動規範を提供し、人間同士の関係を司る。市場取引における契約は不完備（incomplete）たらざるを得ない（すべての事態を予測して契約書に書き込むことは不可能である）ので、道徳が価格の役割を演じなければならないことがある（Bowles 2016 : 34-35 ページ）。その逆（価格が道徳の役割を演じる）ではない（同）。さらに「宗教」は個人の中に行動指針（羅針盤）を提供することによって個人の行動を自他にとってふさわしいものにする。

以下では、以上で概観した潜在能力論のエッセンスを個人に対して発展的に応用した事例と理解できる一つ実践哲学を紹介するとともに、その可能性を論じる。

(1) 高橋（2017 他）が提唱する実践哲学

センの潜在能力論は、良い生活（well-being）という観点から見た場合の個人の状況や社会の状態を評価する基準を提供する。しかし、それは個人の生き方（個人の潜在能力開放ないし人間的成長という視点）、あるいは個人の生き方の変革が社会に対して持つ含意、といったことを直接対象とするものではない。個人の生き方に関する視点を全面に掲げる思想としては、例えば自己実現（self-actualization）論⁹が比較的良く知られているが、センの議論はそうした側面にまで踏み込むものではない。

しかし、潜在能力論を大きく捉えるならば、例えば人が誤った自己意識（false consciousness）を持つような場合も、潜在能力を発揮できていない状態の一つと理解することができ¹⁰、その状況を脱することができれば潜在能力を顕現化させうる、と理解することによって潜在能力論の枠組みを援用できる。そこで、以下では、人間のそうした側面に対して適用可能な一つの思想を取り上げる。それは、高橋（2002、2009、2015、2016、2017 他）が長年に亘って発展させてきたものであり、一つの実践的な哲学と考えることができる。

概要

高橋（2017 他）が提唱する生き方は「唯物的な生き方でもなく精神論でもない理論と実践の体系であり、一貫して目に見える現象と見えない精神の融合をめざす実践哲学」（高橋 2016 : 19-20 ページ）である。そこには多様なことがらが含まれるが、ここでは紙幅の制約

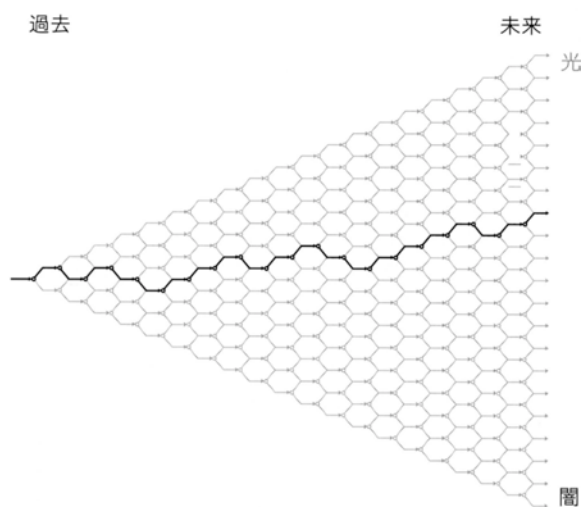
⁹ 人は、自分の能力や可能性を最大限発揮し具現化したいとする行動動機を持つとする考え方。人間の欲求には低次から高次への段階があるとするマズローの5段階欲求説（自己実現はその第5段階に該当する）などがある。詳細は、岡部（2017a : 7章4節）を参照。

¹⁰ Wikipedia “Capability Approach” .

上その概略を示すにとどめる¹¹。

まず、人が時とともに生きる姿は、その人の各時点での判断と行動が次々と継続してゆくことに他ならず、その累積によって人生の航跡が示されてゆくことだと理解できる。すなわち、過去から未来にわたるこうした人生は、人生の樹形図（図表3）としてモデル化できる。ここから明らかなように、明るい人生（図では「光」と表示：歓び・調和・活性・創造）の方向に航跡を残すことことになるか、それとも暗い人生（図では「闇」と表示：痛み・混乱・停滞・破壊）が展開してゆくかは、人が直面する各時点での判断と行動に依存する。

図表3 人生の樹形図



（出典）高橋（2017）図9。

そこで問題は、人が直面する各時点での判断と行動は、何を基準にして行えば明るい人生、ないし良い人生（well-being）、あるいは意義深い人生（meaningful life；*edudaimonia*¹²）へ向かうことができるかという問いに帰着する。つまり、この図の各分岐点において常に「良い判断」をしてゆくためには、どうすればよいのか、である。その問に対して明快かつ実践的な回答を与えており、かつそうした生き方の実践者が現実的に「良い人生」を展開する結果をもたらしている点に、この実践哲学の最大の特徴がある。

高橋（2017 他）が説く生き方とその実践方法は、多くの明快な概念をもとに精巧に組み立てられているが、大きく整理すると三つの段階を踏むものだと理解できる。

第一のステップは、物事を判断する時点（上図の各分岐点）において、自分が無意識のうちに従来どのような傾向を示してきたかを正確に把握することである。これは「言うは易く

¹¹ やや詳細な紹介と評価は、岡部（2017a：12章および13章）を参照。

¹² エウダイモニア。アリストテレスが「持続性のある深い幸福」として規定した概念。岡部（2017a：7章2節～5節）を参照。

行うは難し」の典型的な例であるが、高橋は人間に現れる傾向は4つの類型¹³のいずれかになるという枠組みを提示、各人はそのいずれに該当するかについての診断方法を示すとともに、その傾向を持つことになった原因の理解の仕方、などを提示している。ここではその詳細に立ち入らないが、それら4つのパーソナリティの傾向は、いずれも問題点（欠点）だけでなくそれぞれに固有の秘める力（長所）を併せ持つことが強調されている。

第二のステップは、第一ステップで判明した傾向を矯正することにより、日常生活や物事への取り組みに際して、それぞれの傾向がもつ短所を克服する一方、それが本来的に秘める長所¹⁴を涵養する、ないし顕現させることである。高橋はこれを「本当の人間力」（高橋 2016：28 ページ）の発現、ないし「魂」（高橋 2017：31 ページ）の力の開放だと表現している¹⁵。このためには、当然ながら継続的な自己鍛錬が必要であり、そのため高橋は一般に入手可能な書籍を多数刊行しているほか、多数の公開講演や各種研鑽の場も提供している。

第三のステップは、日常生活において対応を要するさまざまな事態や物事への取り組みをするに際して、その事態をカオス（chaos）と捉える一方、それに対して第二のステップで培った心をもって判断し行動することである。ここでカオスとは、可能性と制約（光と闇）が混在し、どちらにでも傾きどちらにでも結晶化しうる、まだ結果の出ていない混沌した状態を指す（高橋 2017：80 ページ）。つまり、あらゆる現実を、自分自身のこころとセットにして受け止め、そして行動するので、これを「カオス発想術」（同 86 ページ）と呼ぶこともできるとしている。

このような生き方をすること（実践哲学）は、**図表 4**で示したように理解できる。まず、人間の心は、誰の場合でも自然に大きな問題を抱えている（同 134 ページ）。なぜなら、人間が生物である以上、生物にとっては快か苦か（生きやすいか生きにくい）が決定的に重要であり、このため人間は生命体の本能として快感原則（快を引き寄せ、苦を遠ざけるといふ傾向）を持っている、と指摘している（同）。そして、もし人が日常生活あるいは判断を

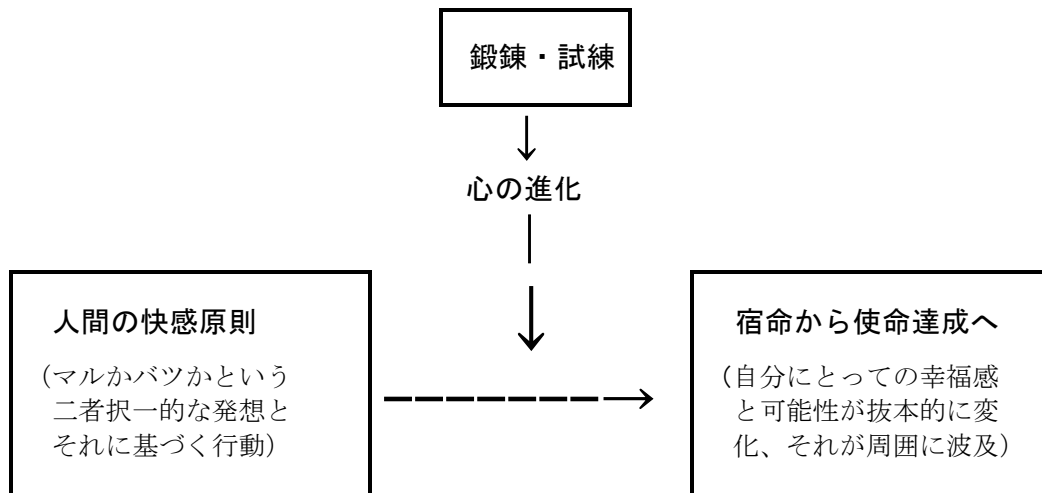
¹³ 「自信家」的症候群、「被害者」的症候群、「卑下者」的症候群、「幸福者」的症候群の4つ。この点を含め、以下の詳細は岡部（2017a：13章）を参照。

¹⁴ 高橋は、このことを菩提心（本当の自らを求め、他を愛し、世界の調和に貢献する心）の発掘と称している（高橋 2016：131 ページ）。菩提心は「私たちに正しい動機、本来あるべき意思をもたらす『大いなる願い』」であり、それは「重力圏を脱するエンジン」のようなものだとしている（同 131-132 ページ）。

¹⁵ 魂は「心の力の源泉であり、私たちの本体」（高橋 2015：72 ページ）であり「智慧持つ意思のエネルギー」と規定されている（高橋 2017：31 ページ）。例えば、大和魂、職人魂などの用語が示すように、魂は物理的なモノとしては見せられないが、もっとも中心にある人間の本質（一時的な喜怒哀楽を超えた価値判断の基準や行動原理）であり、心の奥底にあるエネルギーの源（同）とされる。ちなみに、これと類似した現象が自然科学においてもみられる。例えば、その存在が直接証明されなくともそれを前提にした物質観、宇宙観が論理性・普遍性を持つことが先ず理論的に知られ、後年になりその存在が直接検出されることによって証明されるといったことがある（アインシュタインによって予言され、2016年に直接観測された重力波がその例）。

必要とする事態に直面したとき、その感覚に従った行動（ほとんど無意識的な行動）をすれば、上述したパーソナリティの4類型のうちのいずれか（その短所）が強く現れ、それが周囲（家族、仕事の現場、組織など）に好ましくない影響を与えることになる。

図表 4 高橋（2017 他）が説く実践哲学の構造



(注) 高橋（2017）の2章、3章、4章をもとに筆者が作成。

しかし、自分にそうした心の傾向があることを、心の鍛錬をすることによって（あるいは降りかかる試練を経験することを通じて）自ら把握することができるようになり、そして自分の使命に則した行動ができるようになれば（つまり心がそのように進化すれば）、現れる現実は従来とは全く異なってくる、というのが高橋（2017 他）の主張である。例えば、上記の4類型のうち「被害者」的症候群の傾向を持つ人の場合、鍛錬によって心を進化させ、その強いエネルギーの出し方を転換することができるならば、その人の奥から強い正義感や責任感、一途で切実な勇気が姿を表わすことになり、その人の幸福感が従来と一変する（高橋 2017 : 151 ページ）。そして、それが人と人のつながり（人的ネットワーク）やその人の仕事上の働きを介して周囲や社会を変えて行く。

以上がこの実践哲学の概要である。そこで重要かつ興味深いのは、このようにして生き方を転換することができ、それが社会的にも大きな意味を持った具体的な事例が非常に多く蓄積していることである。高橋の各種著書で報告されている事例の一部を整理したものが図表 5 である。ここで示されているのは、企業経営者、技術者、医師、主婦、スポーツ選手など分野は多様であり、またその育ちや経験も様々であるが、この実践哲学に基づき心を進化させることにより、その人に与えられた使命を果たすことができたことがわかる。なお、この人たちの社会的な活動ぶりについては、新聞やテレビで紹介されたケースも少なくない（同

図の脚注を参照)。

特徴

以上概観した実践哲学の特徴は、次の点にあろう。第一に、その思想としての体系が論理的であり、またきわめて明快なことである(論理性、明快さ)。例えば、人間の考え方と行動の特徴を理解する場合(詳細は略したが)二つの異質の要素を組み合わせた「4つの類型」¹⁶によって理解しようとするアイデアは独創的であり、かつ論理的にも納得がゆく。

第二に、すべての出発点である個人の自己変革に際しては、その具体的な方法がステップごとに示されるとともに、そのためのツール(例えばウイズダム・シートと称するワークシート¹⁷)も開発しており、またそれらが書籍や公開講演会など一般にアクセスできるかたちで提供されていることである(実践性、公開性)。

第三に、個人が新しい生き方を実践することによって個人の幸せが達成できるだけでなく、それが周辺にいる人々の行動を変化させ、さらにそれが次々と波及することによって様々な社会的な問題が解決されてゆくという現実が多く生まれていることである(実証性)。上掲図表5に示されるような実践例とその蓄積は、この実践哲学の確かさと有効性を示しているように思われる。

(2) 実践哲学の評価

最近における国内外の社会状況の変化や思想史の大きな流れを意識した場合、この実践哲学はどう位置づけることができ、またどう評価できるだろうか。

普遍性

第一に、この実践哲学を構成する人間観や倫理は、世界の思想史において中心的な流れを継承しているものが少なくなく、その点において普遍性を持っていると指摘できるだろう(高橋はそうした関連を必ずしも明示していないが)。

例えば、この実践哲学における幸福¹⁸は、単に物質的な豊かさではなく人が自らの使命を達成することによる意義深い人生であるとされており、それは上記4つのタイプのいずれからも

¹⁶ 一つは、人間がものごとを受け止める感覚の基準として「快か苦か」(肯定的に捉えるか、否定的に捉えるか)という座標軸、もう一つとして、心のエネルギーの放出の仕方として「暴流か衰退か」(激しい流出か、勢いの喪失か)という次元をそれぞれ設定。両者を組み合わせることによって4種の類型で人間の思考および行動を理解している。

¹⁷ 目指すべき願いと目的を明らかにすることによって、自分の心のエネルギーの輪郭と焦点を確かにし、行動するための手法(高橋 2017: 195 ページ)。

¹⁸ 主な幸せ思想の対比は、Sachs (2013)、岡部 (2017a: 7 章) を参照。

図表5 自己の変革が仕事や働きを介して周囲や社会を変革した事例

氏名	職業	経歴	個人の自己変革	左記に伴う周囲・組織・社会の変革
A氏	老舗企業の経営者。	一族企業における8代目社長を運命づけられて養育。	<ul style="list-style-type: none"> ・会社の業績が悪化すると社員のせいにし、自分は無難に生きるというのが当初の生き方。 ・自己鍛錬の結果、周囲の人たちとのつながりを強く認識し、会社は共同体であると確信するに至る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社長以下社員全員が一体化、そして新製品を続々と開発することに成功。じり貧であった業績から一転「第二の創業」を実現。
B氏	電動くるま椅子の製造と販売。	海外での自動車冒険。その後、技術を活かすボイラーシステムの会社を創業して発展。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼い頃から「際立つ生き方」を追求、会社創業後も順風満帆の人生。 ・自分の心の声に耳を傾ける鍛錬をした結果、技術を持って他人のために尽くすことこそ自分の仕事（ミッション）だと気づき、くるま椅子工房を立ち上げ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国内の身障者のためにオーダーメイドのくるま椅子を製作。その後はアジアなど海外にもその活動を広げ、パキスタンでは大統領がくるま椅子の交付制度を設立することにも貢献。
C氏	小児科医。	両親や周囲からの勧めと期待のまま医科大学に進学、医師に。	<ul style="list-style-type: none"> ・知識と技術では救えずに亡くなっていく幼児や子供の姿を医療現場で体験し、敗北感とニヒリズムに陥る。 ・人間を深く見つめる鍛錬の結果、医療には「治す医療」だけでなく「癒やし支える医療」もあるはずだと確信。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間の魂を見据えた医療という視点に立った医療こそ自分のライフワークであることを発見。小児の在宅医療という日本では未開拓の分野を確立、その普及に尽力。[注 a]
D氏	医師、重症心身障害児施設長。	医科大学を出て博士号を取得、在外研究の後に国立研究所で研究室長。	<ul style="list-style-type: none"> ・未来を約束された医学研究者として活躍していたが、何か心が満たされない状態。 ・重症患者に具体的に応えたいという心の底から湧いてくる願いに感電、臨床医に方向転換。その後思いがけない試練に直面したが、問題の原因は自分にあったことを発見して自己を変革。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医師と患者という次元だけでなく、人間と人間、魂と魂という次元で患者の子供たちと交流する診療を実施。類似施設のモデルとして注目されている。
E氏	主婦、NPO法人引退馬協会の代表。	裕福な家庭で育ち、嫁ぎ先の家庭で平凡な主婦。	<ul style="list-style-type: none"> ・乗馬クラブを経営していた夫が脳腫瘍で病死、ほとんどのスタッフが辞職。夫の志半ばの想いを受け止めかねていた状態。 ・自己鍛錬により、自分の魂に刻まれた願い（人間と馬の絆、馬に対する想い）を引き出す一方、結果を求める側でなく良い結果をもたらすために自分が原因側に立つという中心軸を確立。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乗馬クラブを復活させることができただけでなく、引退馬がゆっくり暮らせるためにNPO法人引退馬協会を設立、海外の多くの国とも連携する中でその取り組みを開始。
F氏	元スキージャンプ選手。	学生時代から国内外のスキージャンプ競技大会で優勝。	<ul style="list-style-type: none"> ・フィンランドで練習中に大事故（頭蓋骨骨折、脳挫傷、当時は記憶喪失）、さらに後日婚約者がガンの宣告をうけるという試練（その後他界）。 ・事故前から心の練磨に取り組んでいたことにより最善の道が一つあることを確信、日々努力。夫婦が支え合って試練に対応。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大事故から1年3ヶ月後の国体に復帰、奇跡的に優勝。2つの試練に直面した自分だからこそできることがある（それが自分のミッション）と理解、現役引退後は人々を励まし希望をもたらす講演活動に尽力。なお、試練を乗り越えた2人の物語はドキュメンタリー番組として2013年初にテレビ放映された。[注 b]
G氏	都市再開発の企画運営の責任者。	生まれ育った小樽市のビル管理会社で自社ビルを含む再開発の事実上の責任者。	<ul style="list-style-type: none"> ・再開発に関する大きな問題の連続的発生（テナントの倒産、ビルの空洞化、権利調整の難航、反対運動の発生等）に対し、いつか何とかかなるという曖昧な対応。 ・試練は呼びかけであり、全てのことには可能性が含まれるとみる受け止め方ができるように自己鍛錬、そして率先して考え準備する心構えで対応。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のいうことを「聞く、聴く、訊く」そして一緒に考える、という対応を徹底。この結果、小樽駅前ビル群の再開発を実現。

(注1) 具体的には、A氏は野々内達雄、B氏は斎藤省、C氏は前田浩利、D氏は許斐博史、E氏は沼田恭子、F氏は金子祐介、G氏は浅村公二、の各氏を表わしている（いずれも実在の人物）。

(注2) [注 a] C氏による小児在宅医療は、その後NHK「クローズアップ現代」（幼い命を守れ：医療と福祉の連携、2013年5月28日）でも取り上げられた。[注 b] F氏は、朝日新聞の「ひと」コラム（2013年1月15日）でも取り上げられた。

(出所) 高橋（2013b、2014a、2015）の記述をもとに著者が一覧表を作成。なお、注 a と注 b は著者による追記である。

(出典) 岡部（2017a）図表 13-10。

脱却すること（いわばそれら4つの「中点」に該当する行動）が前提とされている¹⁹。このような幸福観は、アリストテレスがエウダイモニアと呼んだ幸福、すなわち「中庸」（mean）を基礎とした生活をもたらす持続性のある深い幸福²⁰に通じる。さらに、それは快楽主義と禁欲主義の中間に位置する「中道」（middle way）の達成を重視したブッダの主張にも重なる。

また、心の転換を図って目指すべき願い（青写真）に近づくことを重視する（高橋 2016：19 ページ）のは、かつてプラトンが「アイデア」と呼んだ理想の設計図の実現に向かうことを換言したものといえる。さらに、そこへ接近するうえでは、何か超越的な力に依存するのではなく、自己の鍛錬、精神修養、実践が重要であるとする点は、ブッダ（原始仏教）の思想と軌を一にする。

また、人間の平等性を主張し、潜在能力（capabilities）の重要性に着目するとともに、そうした人間力の開放を大きな課題と位置づけている点は、上述したとおりアダム・スミスやアマルティア・センの思想と共鳴する。そして特に注目すべきは、この実践哲学は、それを単に一つの思想にとどめることなく実践を重視しているため、自己鍛錬と心の進化（人間的成長）のために開発した具体的なツール（上述したワークシート等）を提供していることである。その点は類例がない。

現代性

第二に、この実践哲学を構成する要素や全体的な発想は、科学（サイエンス）と共通する側面が少なくなく、その面で現代性があるといえる。

この実践哲学では、すべてのものごとを「原因と結果」の関係によって理解する発想が貫かれている。すなわち、そこでは「魂-心-現実」という三つの要素の相互関連が重視されるが、その場合、観察される「現実」には必ず人の「心」が反映しており、そしてその「心」には人間が秘める「魂」²¹の正または負の要素（本源的な願いまたはカルマ）が表れている、と理解する。だから、この因果律を逆方向で適用し、魂の中の負の要素を最小化する一方、正の要素（本源的な願い）を拡大して引き出せば、心が進化し、それが現実を望ましい方向へ変えてゆくことになる。ものごと（結果）はすべて原因があって生じているという理解、すなわち因果関係（law of causality）という視点からの把握はいうまでもなく科学の基礎であり、この実践哲学はその構造を備えている。

また、この実践哲学では、個人の行動こそが（その人の仕事や働きを通じて）社会を変えてゆく力になる、という発想が取られている。こうした理解の仕方は「社会現象は基本的に

¹⁹ その詳細は、岡部（2017a：406-408 ページ）を参照。

²⁰ 前出脚注 12 を参照。

²¹ 「魂」の概念は脚注 15 を参照。

個人の動機ならびに行動に帰着させて（それに還元して）説明ができる」とする考え方に通じるものがある。こうした理解の仕方は、方法論としての個人主義（methodological individualism）²²と称されるものであり、それは社会科学のアプローチとして現代の一つの支配的な分析視角になっている。むしろ、その場合の個人の行動動機をどう前提するかによって描かれる社会像は様々なものとなりうるが、社会の動きを理解する出発点として個人を位置づける点において、この実践哲学は現代の社会科学に親和性を持つ²³。なお、個人の行動が組織の機能度や社会を変える力を発揮するうえでは、個人の各種スキル（組織内での働き方等）やそれぞれの職業に求められる専門能力（法律知識、会計学、医学的知識、教職能力等）を別途磨く必要がある。

さらに、この実践哲学の内容は、一つの科学（心理学）的観点からみても相互に共鳴する思想になっている。人がそのひと固有の使命を達成すること（実践哲学の目標）は、マズロー²⁴の5段階欲求説（自己実現はそこで最上の第5段階に該当する）に従えばその人にとって最も幸せなことである。したがって、この心理学の視点と整合的である。

さらに、アドラー心理学の創始者アドラー²⁵の主張（岸見 2016；アドラー 1984）は、用語面でかなり異なるものの、実体的には高橋の主張と呼応する面を非常に多く含んでいる。すなわちアドラーの主張は、大筋次のようなものである：(1)人間は誰でも成長の過程で事態対応の定型パターン（生活スタイル：style of life）を身につけている。(2)こうした自分の定型パターンをまず具体的に「意識化」してみること、そして選択肢に直面する場合、最も適切なものを選ぶことができるように自分を意識的に変えること、が全ての出発点になる。(3)最も適切な選択肢を選ぶうえでは、他人を尺度にして自分の優越や劣等を考えるのではなく自分の人生における目標²⁶の追求と関連させて判断する必要がある。(4)そのような判断と行動をするならば、過去の事実は変えられないものの過去の意味は変えることができ、したがって現在の行動を変えて未来を変えることができる。(5)人間は他者と結びついて生きる存在である（深いところで共同体感覚を持つ）ので、自分の課題にこのように対応していけば、自分も他人も幸せになることができる。

²² Basu (2008)、岡部 (2017a : 36-37 ページ) を参照。

²³ さらにいえば、この実践哲学は「ミクロ的な基礎を持つ社会改革論」という性格を持つと表現できるかもしれない。

²⁴ アメリカの心理学者 (1908-1970)。その主張は脚注 9 を参照。

²⁵ オーストリア出身の精神科医・心理学者 (1870-1937)。人間は個人が必要な機能等を使って目的に向かって行動しているとする個人心理学（アドラー心理学）を創始。こうした心理学の研究と普及を推進するため、個人心理学国際学会（国際アドラー心理学会、<http://www.iaipwebsite.org/>）が組織されている。

²⁶ 各個人にとっての理想のこと（アドラー 1984 : 8 ページ）。これは、一つの虚構ではあるが心理学者が個人の行動を理解するうえで有効な仮説である（アドラー 1984 : 訳者解説 335 ページ）。高橋の場合における「本心」あるいは「魂」に該当すると理解できる。

これらを高橋の場合に関連付けるならば、(1)は4つの類型による人間理解に、また(2)は心の鍛錬(止観シート²⁷やウイズダムシートへの取り組み)に対応している。そして(3)および(4)は自己鍛錬による人生の使命発見とそれに沿った行動に、(5)は自己変革が各自の仕事や働きを介して社会の変革につながることに、それぞれ対応している。なお、アドラーは実践の重要性を強調しているが、そのための具体的手段を提供するには至っていない一方、高橋はそのための各種ツールを提供している点に大きな特徴があるのは既述のとおりである。

社会性

第三に、この実践哲学は、個人に対して幸せな生き方(well-being)をもたらすだけでなく、個人の行動変化が人と人のつながり(きずな)や仕事などのネットワークを介して社会全体を変えてゆく効果を持つので社会性があるといえる。

これは、この実践哲学の人間観(社会を個人の原子論的な集合として理解するのではなく人間相互の絆によって成立しているという理解)から導かれるものである。個人を幸せにする思想(自己啓発等)は世の中に少なくないが、それが大きな社会的含意をもち大きな成果につながることにもつながるものであるケースは稀有といえよう。こうしたネットワーク効果は今後さらに踏み込んで研究する余地が大きい、社会科学の研究が究極的には「良い社会」の構築に結びつくものでなければならぬとするならば、ここで紹介した実践哲学はそうした研究の対象に入るといえよう。

以上みたとおり、この実践哲学は、人間的な成長をもたらす面を持つほか、普遍性、現代性、社会性を備えている。このため近年、年齢、性別、職業を超えて着実に広がりつつある(高橋 2017: 21 ページ)ので、今後大きな可能性を秘めているのではなかろうか。

5. 結語

主流派経済学においては、通常、人間は利己主義的かつ合理的に行動するという単純な人間(ホモ・エコノミカス:経済的人間)であると前提される。そして、人間社会を全体として理解する場合においても、このような理解を基本とすべきであるという発想(methodological individualism)があり、それが経済学において社会理解の中心的な視点になっている。そのような人間観を前提することは、分析を容易化する面はあっても、人間社会を理解する場合、あまりに極端かつ不自然な前提といわざるをえない。

²⁷ 外界の刺激に対して瞬時に反応する自分の心の動きを見取り、その傾向を発見して心と現実を同時に変革してゆくためのワークシート。

人間の本性 (human nature) はもっと多面的であり、社会を的確に理解するには人間についてより適切な視点ないし前提が求められる。第一に、人の心 (mind) は、他人と深く関わりを持ち、社会的に入り組んでいる (socially entangled) と理解する必要がある (Gintis 2016:xi-xiii ページ)。つまり人の心は社会的にネットワークしており (socially networked)、したがって人間は社会的存在だと理解する必要がある。第二に、人間の状態ないし活動力を固定的なものと考えのではなく、常に潜在能力を持つ主体として理解することが必要である。経済学者・哲学者アマルティア・センが提示した潜在能力論 (capability approach) は、これに焦点をあてつつ新しい幸福 (well-being) 論を展開したものである。

上記 2 つの視点 (社会的存在としての人間、人間の潜在能力) は、社会科学として本来的に重要かつ不可欠の側面であり、それは経済学の祖アダム・スミスが抱いていた人間観でもある (岡部 2018a, 2018b)。本稿ではこの点を明らかにするとともに、そうした視点の発展的応用として位置づけ可能な一つの実践哲学 (個人の良い生活と社会の問題解決を同時に達成する一つの思想) を採り上げ、その可能性を論じた。経済学においては、人間像の前提を見直し、それを踏まえた方向 (いわば「アダム・スミスの人間観、社会観に還れ!」という発想) での研究の展開が期待される。

【引用文献】

アドラー、アルフレート (1984) 『人生の意味の心理学』高尾利数訳、春秋社。(原書: Alfred Adler, *What Life Should Mean to You*, Little, Brown, and Company, 1931.)

岡部光明 (2017a) 『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして—』日本評論社。

岡部光明 (2017b) 「主流派経済学の『失敗』とその対応」、明治学院大学『国際学研究』第 51 号、21-40 ページ。

<<http://hdl.handle.net/10723/3244>>

岡部光明 (2018a) 「アダム・スミスに還れ!—市場・道徳感覚・人間の潜在能力」、総合人間学会 (2018 年 6 月 16-17 日、於明治大学) および日本経済学会秋季大会 (2018 年 9 月 8-9 日、於学習院大学) 発表論文。

<<http://hdl.handle.net/10723/00003367>>

岡部光明 (2018b) 「社会を理解するための三部門モデル: 人間理解に関する理論的補強」、明治学院大学『国際学研究』第 54 号、11 月刊行予定。

岸見一郎 (2016) 「アドラー『人生の意味の心理学』—決めるのはあなたです—」(100 分 de 名著) NHK テレビテキスト、NHK 出版。

鈴木興太郎・後藤玲子 (2001) 『アマルティア・セン—経済学と倫理学—』実教出版。

セン、アマルティア (1988) 『福祉の経済学：財と潜在能力』 鈴木興太郎訳、岩波書店。

セン、アマルティア (2014) 「アマルティア・センによる序文」、アダム・スミス『道徳感情論』(村井章子/北川知子訳) 日経 BP 社、3-32 ページ。

高橋佳子 (2002) 『「私が変わります」宣言－「変わる」ための 24 のアプローチ』 三宝出版。

高橋佳子 (2009) 『Calling－試練は呼びかける』 三宝出版。

高橋佳子 (2015) 『未来は変えられる！－試練に強くなる「カオス発想術」』 三宝出版。

高橋佳子 (2016) 『運命の逆転－奇跡は 1 つの選択から始まった』 三宝出版。

高橋佳子 (2017) 『あなたがそこで生きる理由－人生の使命の見つけ方』 三宝出版。

Basu, Kaushik (2008) “Methodological individualism,” eds. Steven N. Durlauf and Lawrence E. Blume, *The New Palgrave Dictionary of Economics*, Basingstoke, Hampshire; New York: Palgrave Macmillan, pp.586-590.

Bowles, Samuel (2016), *The Moral Economy: Why Good Incentives Are No Substitute for Good Citizens*, Yale University Press.

Gintis, Herbert (2016) *Individuality and Entanglement: The Moral and Material Bases of Social Life*, Princeton University Press.

Robeyns, Ingrid (2016) “The Capability Approach”, Edward N. Zalta (ed.) *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Winter 2016 edition.
<<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/capability-approach/>>.

Sachs, Jeffrey D. (2013) “Restoring Virtue Ethics in the Quest for Happiness,” in Helliwell, John F., Richard Layard, and Jeffrey Sachs (eds.) *The World Happiness Report 2013*, New York: UN Sustainable Development Solutions Network, pp.80-97.

Sen, Amartya (1985) *Commodities and Capabilities*, North-Holland. (アマルティア・セン『福祉の経済学：財と潜在能力』 鈴木興太郎訳、岩波書店、1988 年)

Wells, Thomas, “Sen’s Capability Approach”, *Internet Encyclopedia of Philosophy (IEP)* ISSN 2161-0002, A Peer-Reviewed Academic Resource, accessed December 6, 2017.
<www.iep.utm.edu/sen-cap/>

Wikipedia, “Capability Approach”, accessed December 11, 2017.
<https://en.wikipedia.org/wiki/Capability_approach>